

作物名：いちご

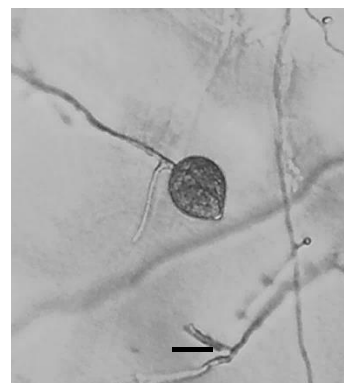
病害虫名：疫病（病原：*Phytophthora nicotianae*, *P. cactorum*, *Phytophthora sp.*）



株の萎凋症状



クラウン部の褐変



疫病菌の遊走子のう

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・本病はクラウン、根、葉に発生する。病原として主に生産現場で問題となるのは *P. nicotianae* と *P. cactorum* の2種である。両種ともクラウンが侵されると株は萎凋し、最後は立枯れとなる。
- ・*P. nicotianae*による疫病は、クラウンとクラウン近くの根の基部が褐変し、のちに葉柄基部に進展する。地上部は萎凋し、立枯れとなる。クラウンを切断すると、その横断面は外側から中心部に向かって褐変し、炭疽病の症状と酷似する。葉では、初期は黒褐色、紡錘形ないし楕円形のやや陥没した病斑を生じ、多湿時には拡大して暗褐色、不整形の病斑となる。
- ・*P. cactorum*による疫病は、はじめ若葉が青みがかった緑色に変わり、株全体が急激に萎凋して枯死する。クラウンを切断すると外側から中心部に向かって褐変し、根や葉柄基部も褐変する。

2 伝染源及び伝染方法

- ・被害植物上で主に菌糸、卵胞子、厚膜胞子の形で、越年して第一次伝染源として、8～9月頃の高湿多湿時期に発芽して遊走子を形成し、クラウン部などに感染する。
- ・発病株に形成された遊走子のうが降雨や灌水時に遊走子を放出し、二次伝染する。
- ・本病は土壌伝染と水媒伝染し発病株に形成された遊走子のうが降雨や灌水時に遊走子を放出して伝染する。

3 発病・伝染好適条件

- ・本菌は卵菌類の一種で、無性器官として菌糸、遊走子のう、厚壁胞子を形成し、有性器官として、造精子、造卵器及び卵胞子を形成する。
- ・本病菌2種による症状は類似するが、発生時期が異なる。*P. nicotianae*による疫病は、7～9月の高温期に発生し、*P. cactorum*による疫病は、低温期に発生する。
- ・多湿条件で発生しやすい。排水不良の低湿地や雨の多い年に発病が多くなる。

4 防除対策

- ・親株は疫病菌の汚染がない無病苗を使用し、殺菌された育苗用土を使用する。
- ・高うねにして排水を良好にする。
- ・雨よけ育苗は発病を抑制できる。
- ・灌水は土壌粒子が飛び散らないように行う。
- ・被害株は伝染源となるので見つけ次第除去する。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全農教）、防除ハンドブック イチゴの病害虫（全農教）、農業総覧原色病害虫診断防除編2-②（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影